幼児の教育　第104巻　第10号　平成17年10月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

10
2005

● 第104巻　第10号　日本幼稚園協会 ●

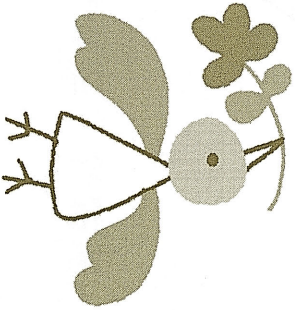
最新刊

子どもの心がかがやくとき

これからの幼児の育ちを考える

漆原智良　著

戦災孤児として戦後を迎えた著者が、自らの体験をもとに、「子への愛情とは何か」をわかりやすく説いています。子どもへの愛情の示し方から、悩む保育者への優しさあふれるアドバイス・絵本の読み聞かせまでを感動的に織りなし、保育・教育・育児にかかわるすべての方々へ贈ります。



●目次から

第1章　ハマユウの花のように
　　—わが半生から学んだ幼児教育
第2章　幼児との温かい心のふれあい
　　—保育者のひとことが子どもを伸ばす
第3章　『読み聞かせ』を楽しむために
第4章　保育の悩み相談　Q&A
第5章　スピーチの基本ABC
第6章　月別『書き出し』文例集

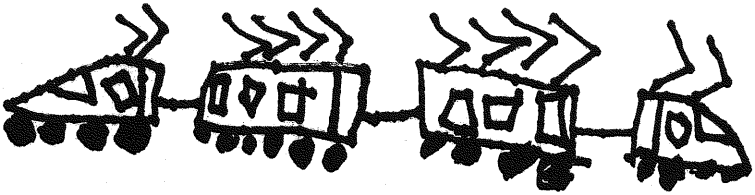
21×15cm／256頁
定価1,365円（税込）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第104巻　第10号



幼児の教育　目次

——第一〇四巻　第十号——

巻頭言　子どもの「時」……高橋　洋代…（4）

死の床の子ども　——一七世紀オランダ絵画が語る家族の思い——……小林　頼子…（8）

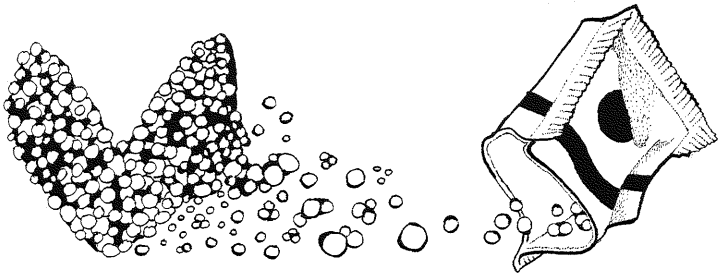
「育ち」という言葉と保育者の経験……浜口　順子…（18）

これでいいの？　男の子の育て方……高原　泰子…（24）

幼児教育の独自性はどこにあるのか(4)　生命のフレーベル　上…矢野　智司…（30）

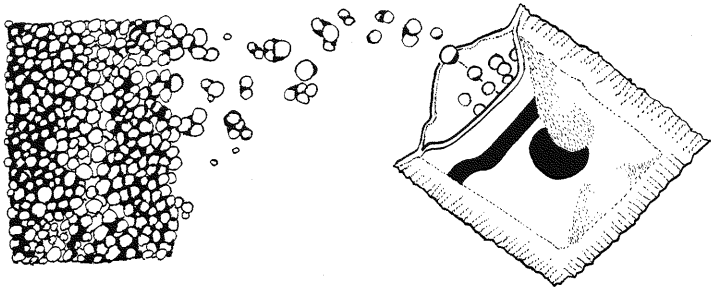
ある日……（36）

© 2005
日本幼稚園協会



私が通った幼稚園・保育園(5)
幼稚園で過ごした日々 ―プールのシャワーが怖かった私へ―……野口 隆子…（38）
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(7)……庄籠 道子…（44）
子どもの写真に見る大人の眼(3) ―子どもに託されたものから―……荒川志津代…（49）
児童学からの出発
地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(2)……小川 清実…（56）

表紙絵／中井絵津子
扉題字／津守 眞
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「丸い果粒」
編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子
編集部／河合 聡子



巻頭言

子どもの「時」

高橋　洋代

専攻科の学生たちは、現在、保育実習の真っ最中である。その実習ぶりを観察するために実習園を訪問するのだが、つい見入ってしまうのが、保育者や実習生の動きではなく、子どもたちの姿、表情である。零歳児、一歳児はよそ者の進入に不安げな眼差しを向け、目が合ってしまったりすると、泣き声が部屋一杯にこだまする。しかし二歳児ともなると、「こんにちは！」と挨拶してくれたり、手に持ったなにものかを見せてくれることもある。彼らはまだどこかに異星人的不可思議さを残しているものの、既に日本語の使い手であり、かつ社交的な人間になっている。

では、これらの幼い人たちは、何を感じ、何を考えながら彼らの「時」を過ごしているのだろうか？

サン＝テグジュペリは『星の王子さま』のなかで、作者の分身ともいえる飛行士にこんなことを言わせている。

「ほんの子どもだったころ、ぼくは、ある古い家に住んでいたのですが、その家には、何か宝が埋められているという、いいつたえがありました。……家じゅうが、その宝で、美しい魔法にかかっているようでした」。

さて、美しい魔法にかかっているのは「家」だろうか？　その家で暮らしていた子どもたちが、そのように感じていたことなのだから、魔法にかかっていたのは「その子どもたちの心」であるといえよう。サン＝テグジュペリにとって、子どもの頃、感じ、考え、動き、身体のなかに染み込んだ、さまざまな記憶は、彼の人生の原点となっている。彼が作品のなかで「目に見えないもの」について語るとき、しばしば、四歳から九歳までを過ごした「サン・モリス・ド・レマンス」の館に還っていく。

私はこの春、その館を訪れる機会に恵まれた。門を入ると丁度、館との中間、庭の真ん中に、既に埋められてしまっている古井戸があった。石を積み上げて作られた古井戸の上には釣瓶は無くなっていたが、縁に木桶が置かれていた。前に見たことがあるような井戸……。そう、それは王子さまと飛行士が砂漠の中に発見した井戸にそっくりだった。そうか、「砂漠で見つけた井戸」、「そこから汲み上げた水は心にも良いもの」、とは、聖書にある「サマリアの井戸」を連想させるが、同時に、この館で過ごした幼い日々の象徴でもあったのか……。そうでなければ、彼がこの井戸の形を描く必要はないはずである。彼はその幼い日々

を、この館でどのように過ごしたのだろうか。「美しい魔法にかかったような」時間とはどのようなものだったのだろうか。どのような体験の中から彼の原点は生まれたのだろうか。

子ども時代の記憶は子どもの頃に過ごした日々のほんの一部に過ぎないが、はっきりと蘇ってくる場面がいくつかあり、サン＝テグジュペリならずとも、それが自分の生き方の根幹と通じ合うものがあることに気付くことがある。

五歳頃のことだったろうか。冬の寒い日の朝、外はまだ暗かった。「なっとう、なっと」という少年の呼び声に、母は私にお金を握らせ、買ってくるようにと言った。縁側まで走り出て「なっとうやさん！」と呼ぶと、男の子が庭に走り込んできた。薄暗い電灯に照らし出された姿は、私より少し年上のよう、垢だらけの細い素足がちびた下駄の上に乗っていた。足先が赤く腫れていた。しもやけ？　あかぎれ？　痛そうだなあ。次の瞬間、私は家の中にとって返してタンスの引き出しから真新しい足袋を引っぱり出し、その子の所へ走って戻った。「あげる」。私はその時「この新しい足袋は私よりこの子のほうが履くにふさわしい」と思ったことをはっきりと憶えている。納豆を腕の中に抱えて母の所へ戻りながら、「きっとお母ちゃんは誉めてくれる」と確信していた。意気揚々と報告する私に、母はがっかりした様子で「あらー、新しいのあげちゃったの？　古い方で良かったのに」と言った。終戦直後の物の無い時代に新しい足袋を手に入れるのは大変だったに違いない。やっと手に入れて、お正月に下ろしてあげようと、喜ぶ子どもの顔を楽しみに、タンスの中にしまっておいたも

のだったのだろう。普段私が履いていた足袋は継ぎのあたったものだったから。今思えば母の一言にも理由があったとは思うのだが、その時の私は母の言葉に心底がっかりしたのだ。それは母に誉められなかったからではなく、「新しい足袋を履くのは私よりあの子の方がふさわしい」という私の正しい（！）判断を大好きな母が理解しなかったことへの驚きと無念さだったのだ。

こういう判断を五歳の子どもが下したということは、考えてみれば不思議なことである。大好きな母親の判断のほうが間違っているという確信も、どうしてもつことができたのだろう。人は、生きていく上で本質的に大切なことを様々に感じ取る力を、幼くしてすでに与えられているのではないか。往々にして大人は、それに気付くことができず、子どもの声に耳を傾けることができない。子どもは、そういう大人に嫌われたくなくて、自然とわき上がる思いを押し殺し、押しつけられる「常識」や「規範」に自らをはめ込んでいくことがあるのではないだろうか。

子どもを見くびってかかってはならない。彼らの思いを大切にしなければならない。人は幼い頃に人生の羅針盤の方向を定めるのだから。子どもが自分の思いを正直に表現できるように、私たちは子どもと共にあるとき、常に謙遜でありたいと思う。

（立教女学院短期大学）

出典　サン＝テグジュペリ著　内藤 濯訳『星の王子さま』岩波書店

死の床の子ども

―一七世紀オランダ絵画が語る家族の思い―

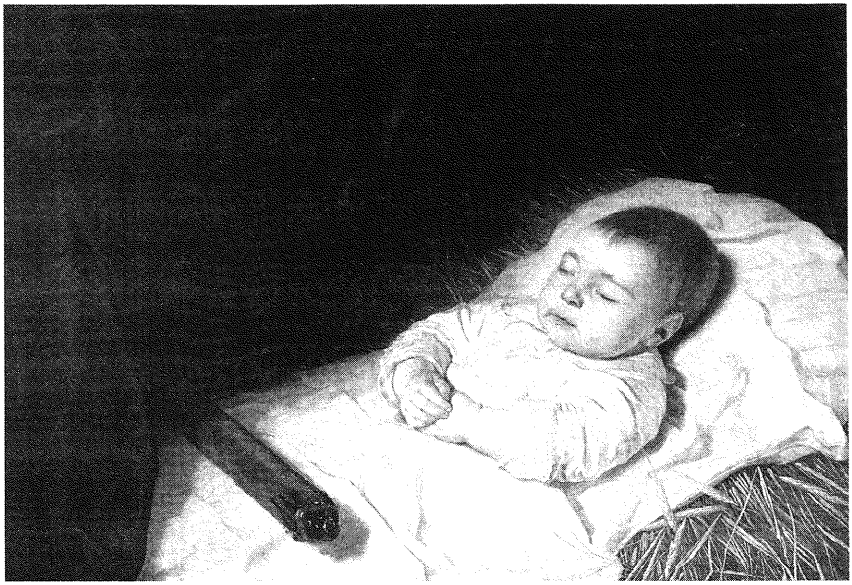
小林　頼子

一七世紀オランダの肖像画家、バルトロメウス・ファン・デル・ヘルスト（一六一四―一六七〇）が、一六四五年、一枚の子どもの肖像画を描いた（図1）。たくし上げられた青いカーテンの下で、白い布を胸までかけ、白い服を着て、白いシーツの上に横たわる幼児。いかにも静かに、穏やかにまどろんでいるように見える。肉付きのいい頬や、ぷっくりした手からは、幼児に特有の、あの濁ったミルクの香りさえ漂ってきそうだ。

だが、何かが、おかしい。なぜ、藁が敷かれているのか。なぜ、胸前で手を合わせ、行儀よく寝ているのか。なぜ、脚の上あたりでトーチがくすぶっているのか。幼児の眠る姿にしてはいささか奇妙ではないか。

すでにお気づきだろうが、この子どもは、死の眠りについているのである。

ヨーロッパ中世の教会を訪れると、墓の上に横たわる



1．バルトロメウス・ファン・デル・ヘルスト、《死の床の幼子》、1645、ハウダ、市立美術館

王族や司教の死者彫刻にしばしば出くわす。[1] 石にかたどられた、厳粛で冷たい死。見る者は、思わず知らず頭を垂れ、しばし瞑想的な気分にひたるに違いない。しかし、「死」が豪華な墓に納められ、十分すぎるほど世俗化され、牙を抜かれているため、目の前に横たわる者の死を悲しむことはめったにない。ずっと昔の大人の死であることも、気持ちをやわらげる。時間には怖れや悲痛を鎮める力が備わっているのだ。

ところが、一七世紀のファン・デル・ヘルストの描いたのは、無防備な、年端のゆかぬ子どもの頑是ない死の姿である。誰もが、あまりに短く終わった生を不憫に思い、命のはかなさに震撼とするのではないか。しかも、顔からは、まるでさっき息をひきとったかのように、生の気配がなお立ちのぼる。死を過去のものと片付けるには、死者にも死者を送る側にも、いま少し時間が必要だったのかもしれない。おそらく彼らの無念さが、冴えた写実の技とあいまって、生けるがごとき死の床の子どもの像を創り出したのであろう。

2．ヤン・メイテンス、《ウィレム・ファン・デン・ケルクホーフェンとその家族》、1652/55、ハーグ、歴史博物館

3．コラース・マース、《ガニュメデスに扮したヘオルフ・デ・フィック》、1681、ケンブリッジ、フォッグ美術館

こうした死の床の子どもの肖像画は、知られる限り、南ネーデルラントの一五八四年の作例が最も古い。その伝統は、一七世紀に入ると、むしろ北ネーデルラント、すなわちオランダの地域で関心を呼び始め、しかし早くも一八世紀初めをもって姿を消していく。[2] そして一九世紀になって、写真という新しいメディアとともに再び息を吹き返してくる。[3] 以下、本稿では絵画に話を絞るが、現存の作品数は三〇点余。ファン・デル・ヘルストの前述の作例のような見逃しがたい優品が混じっているものの、幼い死を衆人環視のもとにさらすことを忌み嫌ってか、こうした絵画が美術館で展示されることはめったにない。[4]

一七世紀にあっては、早世した子どもの似姿を残しておこうと思えば、画家の手腕に頼るしかなかった。では、生きている子どもと亡くなった子どもの違いをどう示すのか。その求めに、一体、画家たちはどのように応じたのか。

家族の肖像画の場合、逝った子どもには翼をつけ、空を舞わせ、この世のものでないことが暗示された。ときには、プットーのように翼つきの裸体で描くこともあった（図2）。裸体は、伝統的に聖性を帯びたものとみなされており、神の御許に召された子どもにふさわしいと考えられたのである。

しかし、これでは一七世紀絵画の特徴である現実性が損なわれる。その欠点を補ったのが、亡くなった子どもにシャボン玉吹きをさせる画像である。シャボン玉は、子どものごく自然な遊びの一つでありながら、よく知られた死の象徴でもあったからだ。人の命をすぐにもはじけるシャボン玉にたとえた言葉、ホモ・ブラは、古くからの言い習わしで、絵画化される際は、ほとんどいつも子どもを主役にしていた[5]。

肖像画のなかに入れ子で肖像画を描きこみ、亡くなった子どもをその画中画の像主にするという手法もときに用いられた。絵に描かれた人々の生きる現実と、死者の生きる世界は異なる。その幽明の差を、画中画を利用して明示したのである[6]。

亡くなった子どもを鷲にさらわれるガニュメデスに見たてた肖像画もある（図3）。美少年ガニュメデスに恋をしたギリシャの最高神ユピテルは、鷲に姿を変えて彼を強奪し、自らの酌係とした。古来、若者に対するホモセクシャル嗜好のかっこうの口実とされてきたこの物語は、一七世紀になってキリスト教的に読み替えられ、子どもの死のイコノグラフィーで一役買うことになる。ガニュメデスは天上に昇る魂の寓意とされ、それゆえに、鷲にさらわれる幼児は、ガニュメデスのごとく神の御許に召された魂と解されたのである[7]。

こうした子どもの死のイコノグラフィーのなかで、死の床の子どもの肖像画は見る者の心をひときわ騒がせる。幽明の境を越えてしまった子どもの姿を、図像や文化の伝統といった「小道具」に頼らず、ストレートに捉え、目の前の出来事として現前させるからである。とはいえ、そうした絵も、図像あるいは文化の伝統をこと

ごとく排除していたわけではなかった。

上述の中世の墓などに、炎を下にしたトーチをもつプットーが添えられることがある。[8] 逆さ炎は、古来、死を寓意するモティーフだったからだ。ファン・デル・ヘルストの作例で、膝の上あたりに置かれたトーチも同じ役割を果たす（図1）。幼児は、いかに生きているように見えようと、死んでいる。死を悼んだ絵であること、それを見る者に間違いなく伝えるために置かれたトーチなのである。

幼児の下に敷かれた麦藁は、まずは、復活を象徴する。典拠は、新約聖書ヨハネ伝一二章二四節、「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それはひとつのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」という記述である。麦に託して、救世主イエスは十字架上に死んでこそ復活のときを迎える、と語っているのだ。誕生したばかりのイエスがときに地面の上に敷かれた麦藁の上に寝かされ、中世の作例で女性の遺骸が麦藁の上に横たわるのは、このためである。そして同じ復活の願いはファン・デル・ヘルスト描く幼く逝った子どもにも込められている。ただし麦藁は、同時に、当時の葬祭の慣習をも反映する。死者に取りつくかもしれぬ悪霊。死者を送った後に、敷いていた藁を燃やし、その悪霊を退治してしまおうというのである。それは、死者を横たえたベッドを、気持ちよく再利用するための実際的な知恵でもあった。[9]

ユリアーン・オーフェンス（一六二三―一六七八）が描く《死の床の子ども》（図4）では、子どもが大きな枕に頭を沈め、薄い下着の前をはだけて眠る。ベッドの上に、シーツも敷かず、直接横たわっているので、軽い午睡の最中にも見えるが、傍らに立つ子どもの背に翼があること、その右手にバラがあり、しかもそのバラの花びらがいままさに散っていることを見逃してはならない。花は名だたるヴァニタス（命のはかなさ）のモティーフだが、それが散っているとなれば、その意味はおのずと強調される。画面左下の隅に描かれた翼付きの砂時計もヴァニタスをあらわす。死の寓意像がしばしば

砂時計を肩に置いて登場することを思い出そう。つまり、子どもは眠っているのではなく、はかなくも死の床にあり、死という幽の世界に住まう者ゆえに半裸なのである。

フェルディナント・ボル（一六一六―一六八〇）の描いた子どもは（図5）、銘文によれば、一六五九年四月四日にケルンに生まれ、同年七月一四日にアムステルダムに逝ったヨース・ファン・デン・ベンプデンである。ケルンの商人だった父は、ヨース誕生の前年にアムステルダムで結婚し、ほどなくして同市に移住した。[10] おそらく彼の第一子だったであろうヨースは、生後わずか三か月余にして鬼籍に入った。麦藁ではなく、普段どおりにベッドに横たわるが、贅沢な枕、白いシーツ、着崩れのない服が、幼子の死をまざまざと想起させる。足もとにはトーチがくすぶり、手にはバラのつぼみが握られている。どちらも死を表象するモティーフであることはすでに触れたとおりである。

死を題材にした絵には、ときに葬祭の習慣が反映する。死者が敷く麦藁はその一例だが、ボル作品には別の典型的な細部が見られる。幼児の頭部を飾る花の冠である。芳香の強い花や草で編まれたこの種の冠は、かつては死者にとりつく悪霊を祓うものと信じられていた。当時のオランダの国教はプロテスタントだったが、教会も各市当局もそうした習慣に眉をひそめた。そこにカトリック的な迷信が紛れ込んでいると判断したからだ。たとえばデーフェンテル市は一六四四年に「死んだ幼児に花輪を添えたり、月桂樹やローズマリーの枝を捧げた場合は、二五ギルダーの罰金を科す」と決定した。その種の慣習の横行がしのばれよう。ボル作品をはじめとする死の床の子どもの肖像画もその浸透ぶりを裏打ちする。一見するとストレートな表現のようだが、死の床の子どもの肖像画も、実際には、現実と絵画の伝統とが微妙に交錯する中で成り立った作品なのである。

おもしろいことに、一七世紀も終盤になって、伝統的なモティーフからも習慣からも解放された、きわめてシ

4．ユリアーン・オーフェンス、《死の床の幼子》、1660頃、クリスティーズ、アムステルダム

5．フェルディナント・ボル、《死の床のヨースト・ファン・デン・ベンプデン》、1659、アムステルダム、シックス・コレクション

6．ヨハネス・トパス、《死の床のファン・ファルケンブルフ家の幼子》、1682頃、ファン・ファルケンブルフ財団

ンプルな幼き死者の像が登場する（図6）。朱のカーテンの下がったベッドに、朱の毛布をかけて横たわる幼児。その朱と、大きな枕・シーツ・毛布の襟の白が際立った対照を見せる。幼児の身につけるレースの服、頭巾も白である。ほかに色といえば、子どもの肌の色だけ。しかも、花の冠も、砂時計もトーチもない。単純きわまりない作品である。身につけた贅沢な衣服だけが、まるで生きて、眠るかのように見える幼児が、実は死者であることを物語る。さまざまな作画上の小細工が放棄されている分、幼児の死という事実が切実に浮かび上がってくる。

ちなみに、作品の来歴から、この子の両親が門閥市民の一員で、一七世紀の第四・四半世紀にはハールレム市の行政において重要な地位を占めていたことが判明している[11]。カトリック的迷信を振り払うべき立場にあった市当局者として、迷信と結びつく花輪や草で死者を飾ることができなかったのだろうか。いずれにしろ、死者を死者とわかるように描く子どもの死のイコノグラフィーの中にあって、きわめて珍しい異例の作品である。

一七世紀の平均寿命は短かった。疫病の流行、戦争など、要因は幾つも考えられるが、なかでも数字を大きく引き下げていたのは、医学の未発達、衛生環境の劣悪さから生ずる乳幼児、産婦の死亡率の高さであった。オランダも例外ではない。画家レンブラント（一六〇六―一六六九）の場合、生を受けた子ども四人のうち、三人は乳児のうちに逝き、第四子だけが成人した。そして妻は、その四人目の子が生まれて九か月後に亡くなった。一四人の子宝に恵まれた画家フェルメール（一六三二―一六七五）の場合にも四人は夭折している。二人の画家は一七世紀オランダ社会の中で経済的に恵まれた層に属しており、それだけに妻のお産の環境も良好だったはずだ。それでも、生まれた子どもの四分の三あるいは三分の一は乳児期を生き抜けなかった。統計調査からも、生まれた子どものうち半分は一八歳以前に死亡し、そのうちの八〇パーセント近くは五歳未満での死亡だったこと

が判明している。[12] 子どもの死は日常茶飯事であり、死の床の子どもを目にする機会はあり余るほどあったのである。

こんなふうに子どもが次々に死んでいった時代には、親は子どもの死に鈍感だった、「子ども」が発見されたのは近代のことだ――フィリップ・アリエスはそう主張し、子ども史に一つの大きな転換点を印した。[13] 彼のこの子ども観には、その後、さまざまな反論が試みられたが、その際、右に挙げた死の床の子どもの肖像画も反証の一つに狩り出された。[14] それらの肖像画には、打ち続く子どもの死にもかかわらず、子どもの死に対する深い哀惜の念がすでにあふれているではないか、というのだ。しかし、当のアリエスが、死んだ子どもの肖像画に注意を促しながら、一七世紀には中世にはなかった子どもに対する「新しい感性」がすでに生まれ始めていたと認めていることも忘れてはならないだろう。[15]

むしろ、ここでもう一度思い出すべきは、死の床の子どもの肖像画が本格的に「子どもの発見」が始まる一八世紀になるとほとんど描かれなくなったという意外な事実である。つまり、死の床の子どもの肖像画の制作と子どもに対する「新しい感性」とは切り離して考える余地があるということだ。子どもの死を悼む感情とは別の何かが、死の床の子どもの肖像画の制作を促していた可能性があるのである。

それは、一体、何なのか。なかなかに興味深いこの問いに、残念ながら、確たる答えを筆者はいま持ち合わせていない。しかし、さしあたっては、ドルトレヒトの宗教会議にヒントの一つがあるかもしれないと推測している。一六一八―一九年に開催されたその宗教会議では、幼くして亡くなった子どもたちも、親が神を敬う者であるならば、選ばれし者となり、聖別される、彼らは怒れる神に連れ去られ、永劫の罰を受けるわけではない、という教義が確認されている。[16] 夭折した子どもも天国に召される、というお墨付きをもらった親は、教義の記憶がなお鮮明だった一七世紀に、死の床の子どもの肖像画を描かせ、子の救済を願った。それは、とりもなおさ

ず、親みずからの信仰を顕示し、確認し、自らの来たるべき救済を乞う行為でもあった――そんなふうに考えてみたいのである。弔いの形は、常に、遺された者の社会的メッセージを抱え込む。死の床の物言わぬ子どもは、実は、生者のありうべき姿を、まことに雄弁に物語っているのではないだろうか。

（目白大学）

註

1）キャスリーン・コーエン『死と墓のイコノロジー』（小池寿子訳）、一九九四、平凡社に数多くの作例が紹介されている。

2）*Kinderen op hun mooiste*（exh. cat. ed. by J. B. Bedaux et al.), Frans Hals Museum et al, 2000-2001, p. 192

3）同前

4）近年の例外として、一五〇〇年から今日に至るオランダの死の床の肖像画を集めた以下の展覧会がある。*Naar het lijk*（ed. by B. C. Sliggers), Tylers Museum, Haarlem, 1998

5）詳細は森洋子『シャボン玉の図像学』未来社、一九九九、を参照されたい。

6）家族の肖像画の一〇パーセントは、亡くなった人を何らかの形で描きこんでいる。Naar het lijk（註4）p. 97を参照されたい。

7）*Kinderen op hun mooiste*（註2）pp. 289-291

8）『17世紀オランダ肖像画展』（エディ・デ・ヨング監修）、東京ステーションギャラリーほか、一九九四、p. 110

9）同前

10）A. Blankert, Ferdinand Bol, Doornspijk, 1982, p. 143

11）*Kinderen op hun mooiste*（註2）p. 292

12）*Naar het lijk*（註4）p. 57

13）フィリップス・アリエス『〈子供〉の誕生』、杉山光信ほか訳、みすず書房、一九八〇（原書初版1960）

14）*Kinderen op hun mooiste*（註2）pp. 88-90

15）フィリップス・アリエス『〈子供〉の誕生』（註13）pp. 44-47

16）*Naar het lijk*（註4）p. 94 *Kinderen op hun mooiste*（註2）

「育ち」という言葉と保育者の経験

浜口　順子

一．保育者の子ども観と「育ち」という言葉

子どもを育つものとして見、その育ちをいかに援助すべきか試行錯誤する、これが、保育者の認識論である。すでに子どもを「育つ」ものとして見てしまっているということを、どのように考えたらいいのだろうか。

近年、保育現場に近い領域で、「育ち」という言葉を非常によく見聞きするようになった。「育ち」という、もともと日本社会において古くから使われてきた和語の体言が、新たなニュアンスをになって、保育関係者たちに多く使われるようになったことに着目し、このことが現代の保育者の子ども観にどのような変化をもたらし、

また保育者が「育ち」をどのように経験しているのかについて考えたい。近代の科学的価値観の下では、「発達」は客観的事実として追究されてきた。ここで主題とする「育ち」とは、従来の「発達」理論的知識を思考の枠組みの一部に組み込みつつ、保育者が子どもとの関係性のなかで相互主観的に把捉する「育ち」である。

二．「育ち」という言葉の使用法の変化

「育ち」という言葉は「氏より育ち」「東京育ち」などの伝統的言い回しで使われることがいまだに多い。他方、たとえば次の保育研究者の発言に見るような別の用法が生まれている。

> 子どもの育ちについて考えていきますと、どうもすっきりとした図に描けるようなものではないことがわかってきたように思います。……ある状況が子どもの様々な育ちにからみあっているということを、保育者としてきちんと受け容れていけるのかどうかが大事になってくるでしょう。これまでの発達の理解などというとすぐに身体的発育は……、とか、音楽的表現の発達は……、などと、発達の側面を抜き出して考え、その点での対応を考えることが多かったように思います。（大場幸夫　一九九二）

この発言に見るように、一九九〇年代には「育ち」という言葉を「発達」と差異化して使用する傾向が、特に保育実践現場に近い人たちの間で生まれていた。戦後の、「そだち」をタイトルかサブタイトルにもつ書物（国会図書館所蔵の和図書）を検索すると、左のように一九七〇年代前後から伝統的用法とは異なる、「保育的用法」というべき「育ち」使用が徐々に見られるようになる。

①戦後～一九六〇年代前半まで…「保育的用法」以前の時代

②一九六〇年代後半～一九七〇年代…保育問題研究会などの集団保育論や障害児・者の権利保障論などにおいて、「育ちあう」に代表される新しいニュアンスの「育ち」使用の萌芽がみとめられる。

③一九八〇年代～現在…個の成長の主体性・相互性に価値がおかれ、学校臨床や親子カウンセリング、保育現場・地域子育て支援・家庭間の関係の創生、家庭教育の見直しなど、「育ち」が保育をめぐる総合的な領域へ広がりを見せる。特に一九九〇年以降の「育ち」使用の増加は、八九年の幼稚園教育要領の改訂と関連があると考えざるを得ない。

三．「育ち」「発達」という言葉へのイメージ

現職の幼稚園・保育所の保育者を対象におこなった質問紙調査で、「育ち」「発達」という言葉についてのイメージについて自由記述で書いてもらった結果、二つの特徴があった。まず、キーワードを比較すると、「育ち」に関連して、「環境」「周囲・周りの人」「その子」「一人ひとり」など、幼稚園教育要領における重要な概念がほとんど対応しているのに対して、「発達」に関連しては「身体」「段階」「年齢」「能力」など客観的な基準が多くを占め、ステレオタイプ化した発達観を見ることができた。また、身体の「発達」に対して、心の「育ち」を対置する、心身二元論的傾向が顕著であった。

四．文脈としての「育ち」

次に、保育者が「育ち」をいかなる文脈において記述しているのかを、保育記録等から跡付けてみよう。すなわち、「育ち」「育つ」やその類語である「成長」「発達」などの言葉で明示されてはいない、「育ち」の文脈的特質を読み取ると、その結果①存在感、②身辺自立の獲得、③能動性、④相互性、⑤保育者の視点の変化、⑥保

育者の自己意識の変化、の六つの局面が浮上した。この中で「身辺自立の獲得」だけが可視的な局面となっており、異質ともいえる。この局面が「育ち」を語る文脈に強く現れるかどうかは、保育所・幼稚園・施設等の保育方針の特性によって分かれるところである。目に見えにくい「育ち」の局面を重視する保育者には、目に見えやすい「育ち」に気を取られすぎていると子どもとの関係性を気づきにくく、子どもの生活に根ざした保育を実現できない、という実践的な意識が働くようである。

五．保育者の「構え」としての「育ち」

最後に、相互主観的な「育ち」観を生成する保育者の生活世界に、「育ち」という言葉を生みだす「構え」について考える。保育者の生活世界は、保育者の帰属する文化や社会などのマクロな社会的関係に影響を受けながらも、子どもや同僚保育者などとの直接的な関係性によって触発されるミクロな社会的関係から日々影響を受け変化し続けている。このミクロな関係性の中で「育ち」という文脈が語りだされる保育者の在り方を、認識のパーソナルな準拠枠である「構え」として、現象学的に記述してみたい。

【時間の断続性　―時間の流れを作り出す「育ち」―】

子どもの「育ち」は、「最近変わった」とか「～ができるようになった」などと、過去の状態との比較でよく語られる。また、保育者側の認識の変化として「かわいくなった」「気持ちが通じるようになった」など、子どもと保育者の関係性の変化として、語られることも多い。子どもの変化、あるいは子どもと保育者との関係の変化に気づき、保育者がなんらかの開かれた未来との関係性を予感して特筆する事象が「育ち」である。

紙数に限りがあるため、ここでは「出会い」「別れ」という時間の断続性についてのみ言及する。日々の連続した保育過程の中で保育者は、前もっての情報、知識、

理論的枠組みなどを一度棚に上げて、できるだけその日のその子どもの状況に即した理解ができる状態に自分を置こうとする。これが子どもとの「出会い」を用意する。一方、保育者はその子どもとずっと一緒にいられるわけではない。子どもが幼稚園や保育所から帰宅して、次の日登園するまでは会えない。立場を逆転させれば同様のことが、親などの保護者にとってもあてはまる。保育する者と子どもの間の時間は連続していない。また一日の保育時間の中で、一人の保育者が特定の子どもと連続して関れないという意味での「別れ」もある。こうして保育者と子どもの間にくり返される「別れ」と「出会い」が意味しているのは、子どもの育ちが保育者の直接的な見守りの中に持続してあるものではなく、むしろ、保育者の目の届かない時間と領野が、子どもと保育者の間には無限にひろがっているということである。

保育における「別れ」の不可避性は次の二点において重要である。第一に、子どもと保育者がそもそも別の世界を生きている存在として保育の場で出会い、そのことがむしろ子どもの育ちと保育者の生成を可能にするという点において、また第二に、子どもの育ちを促す環境的ファクターとして自分以外のものが多様に関っているという客観的事実をいさぎよく保育者が認め、それを前提に自分のできることを探求する態度をもつという意味において、である。

【育ち育てることの相互性】

「育つ」ということが「育てる」という他動詞的行為と不可分の関係にあることを、次の三点からとらえられる。①「育ち」は意外性のもとに起こることが通常であり、どの環境設定、いずれの働きかけが子どもの育ちに関与したのかどうか、ということは不可知のままであって、わかり得たとしても、それは子どもが一定の成長を

遂げた後に蓋然性の高い話として語ることができる程度のことであるということ。②保育の中で実際に子どもと関っていると、子どもの方が大人の自分よりまさっている、あるいは対等だ、という印象を得ることがよくあり、逆説的ではあるが保育者が成長するのと比例してそれは、より実感されるようになる。③保育者個人の子ども理解の変化、当の子どもの変化、同僚の子ども理解の変化が連動して起こりやすいという事実。「子どもがかわいく思えるようになった」というような変化＝「育ち」の原因を、子ども、保育者自身、職場環境いずれか一点に収斂することはできない。

六．言葉に注目する保育研究の可能性

保育における常套的な言語使用に代表される、慣れ親しんだ観念の枠組みがいかなるものかを自覚しなければ、それを、部外者に伝えることはできない。自国語だけで外国人との意思の疎通を図るようなものである。「場」の違いをふまえて、言葉の意味の共通部分を確認し、同時に相互間で生じているズレを克服するという方法は、一個人が職場を移る場合をはじめ、幼保・幼小連携、多種の専門機関の協力、地域的子育て支援など、これからますます期待されている「異」領域交差において、相互理解のための不可欠な方略である。それによってはじめて、保育者は真に主体性をもって実践的な経験を語りだすことができるのだと思う。

（お茶の水女子大学）

＊原和夫・本吉圓子・大場牧夫　一九九二　第四回保育研究シンポジウム　発達の理解と保育　保育研究13―2、建帛社、六五―七九頁

＊この文章は、筆者の博士論文『保育者の省察における「育ち」概念に関する現象学的考察とその保育学的意味』（二〇〇五、お茶の水女子大学）の一部をまとめたものである。

これでいいの？　男の子の育て方

高原　泰子

今、幼稚園で男の子は……

物議をかもしそうなタイトルですが、まあ聞いてください。

五歳児のクラスが園庭で、二チームに分かれ、リレーをしています。ただ走るのでなく、トンネルをくぐり、ゴムひものハードルを飛び越え、最後につるしてある鈴をジャンプしてたたき、次の走者にタッチするゲームです。

A男は、トンネル、ハードルとうまくいきましたが、最後のジャンプで鈴に手が届きませんでした。「もう一回ジャンプ！　がんばれ！」の教師の声にもう一度やってみますが、ま

たしても手がはずれます。すると、A男は突然その場に崩れ落ち、声を上げずに泣き伏します。次の走者がスタート地点で「おーい！　A君早く！」と呼んでもなお、A男はそのポーズを変えません。相手チームはこのすきにどんどんリレーを続けています。A男のチームからは落胆の声が……。

このような姿は昔からありました。でも、友達や先生の励ましの声で何とかやり遂げるとか、失敗にもめげず、けろっとしているとか、そんな男の子が多かったものです。

A男のこのような姿は、何かにつけて現れるのです。友達の作品にぶつかって壊してしまい、謝れない時や、課題ができないような時など。A男はこの時、どんな気持ちなのでしょう。

他にもこんな男の子がいます。

お母さんが体調不良のため、B男を休ませるという連絡が入りました。次の日も休んだため、担任が夕方電話しました。ちょうど、誕生会に向けてグループ活動をしている時だったので、担任としては、自分が迎えに行ってでも、B男に登園してほしかったのです。「（クラスの）お近くの方にでも送り迎えをお願いしてみてはいかがでしょう」とお母さんに話すと、「ええ、そう思ったのですが、B男が『お母さんが治るまで、僕は行かなくてもいいよ』と言うものですから、もう少し休ませます」という返事でした。

担任は考え込んでしまいました。B男にとっての幼稚園は、何が起きても行きたい場所で

はないのか、と。

やさしい子が増えている

ある区で、幼稚園・保育園・小学校の教師、保育士の連絡会が開かれました。その中で、現代の子どもたちの様々な課題が挙げられました。

一方で、育っている部分は何か、という話し合いになったとき、幼・保・小共通の見解は、「やさしい子が多い」ということだったそうです。

しかし、話し合いが進むにつれ、そのやさしさは、一見やさしいが、たくましくなれない裏返しの姿である、という結論になりました。たとえていえば、それは、誰かがケガをして泣いている姿を見た時、「先生、あの子が泣いてるよ。何とかしてあげて」というものであり、決して、自分からその子の側に寄り「大丈夫？　どこが痛いの？」という姿ではない、ということでした。

現代の子どもは、大人とは通じるが、子ども同士の関る力が弱っている、とよく言われることを裏付ける話だと思いました。

先ほどのA男、B男の話に戻ります。

保育現場で近頃とみに話題になっていることは、ちょっと語弊がありますが、男の子が情けなくなっている、ということです。ジェンダーフリーの考えに異を唱えるつもりはありま

せん。幼児期こそ男女の決め付けや分け隔てをせず、豊かな子ども時代を過ごすことで、人間としてより良く生きていく基礎を培うべきと考えます。男の子だから強くあるべきだ、女の子だからやさしくあるべきだ、とは思わないのですが、それにしても、「男の子たち、それでいいの？」と思うことが多々あります。

自分のことしか考えられない男の子（確かに幼児は自己中心的な存在ではありますが）、失敗に弱い男の子（誰でも失敗すれば多少は落ち込みますが）、意欲がない、思い切り遊べない、発信がない、こういう男の子が増えているような気がします。

一方、女の子はといいますと、程度の差はあれ、意欲がある、周りの状況が見える、失敗にめげない、根気強い、発想が豊か、工夫をする、エネルギッシュ……となかなかの姿を見せています。我が園だけの話でしょうか。そうではないと思います。男の子の育ちが変わってきているのです。

何が変わったのか

男の子と女の子の比較をすることはあまり望ましくないでしょう。個人の問題であることが多いからです。

それはさておき、男性に対する社会の目や期待が変化したことは事実です。その見方が子どもにも降りてきていていきおい、育て方が変わってきたのかもしれません。少子化も影響

していると思います。便利で豊かになった世の中が、男の子にたくましさを求めなくなった、と言ったらあまりにも言いすぎでしょうか。

今の世の中、女性は老いも若きも元気ハツラツ、男性はやや停滞気味、そんな風潮が子どもの社会にまで反映してる？　なんて、そんな単純なことではないのでしょうね。男の子は生物学上、もともと弱い特質をもっている、と聞いています。女の子も同様に、優しさやたくましさを特質としてもともともっているのでしょう。子どもを健全に育てるには、良い点を伸ばしたり、負の部分を転換させたりする必要がありそうです。

A男やB男の姿をこのままにしておいたらどうなるのでしょうか。最近の問題行動を起こす少年の育ちには、共通なものがあると言われています。

・　豊かに育っていること
・　甘やかされていること、あるいは放任されていること
・　父親との関りが薄いこと

などです。特に男の子に問題が起きやすいということは、男の子の育て方が難しいからではないでしょうか。そして、現代社会が一層難しさを強めている気がします。

昔の知恵を今に活かして

「年寄りっ子は三文安い」。最近はあまり聞かれませんが、確かこういうことわざがありま

した。

これは、子どもを甘やかすと良いことはない、という意味だと思います。年寄りはだんだん体がきかなくなってくる、孫を可愛がりたいが体が思うように動かない。そこで、欲しがる物を何でも与えたり、何でもいうことを聞いたりする。その結果、わがままな子どもが育つ、といった意味でしょうか。あくまでもたとえであり、実際にはお年寄りに育てられて立派に育つ人も大勢いるわけです。

昔の人も、今でいう子育てのマニュアルをこういうことわざでたくさんもっていたのではないでしょうか。マニュアルという言葉が適切でないなら、子育ての教え、とでもいうものを、昔の人も活用していたのではないでしょうか。

子育てが母親だけの仕事でなく、家族、隣近所、地域の人々など、みんなの力でなされていた頃、誰が言うともなくこのような子育ての教えがそっとささやかれ、子どもに関る大人が自分の接し方を戒めたのではないかと思うのです。

男の子の育て方、女の子の育て方なんて区別はないのかもしれません。それよりも、人としてどう生きるか、生きるために小さいときに何を育てるか、だけが必要なのかもしれません。

でも、それをどこかで子どもを育てる大人は知る必要があります。親も教師も。幼稚園がその仕事を担う役割であることは確かなことのようです。

（東京都文京区立青柳幼稚園）

幼児教育の独自性はどこにあるのか(4)

矢野　智司

生命のフレーベル　上

フリードリッヒ・フレーベルの名前は、保育理論や幼児教育の授業のなかで、幼稚園の創始者として、一度は耳にしたことがあるでしょう。しかし、その思想の中身となると、フレーベルの著作は、ロマン主義の難しい用語が続き、そう読みやすいものではありませんから、著作を読んだ人はそう多くはないでしょう。フレーベルの思想上の主著とされている『人間の教育』(荒井　武訳　一九六四年)は、いまでも岩波文庫で読むことができます。その冒頭の箇所を少し引いてみましょう。

……すべてのものの使命および職分は、そのものの本質、したがってそのもののなかにある神的なもの、ひいては神的なものそれ自体

を、発展させながら、表現すること、神を、外なるものにおいて、過ぎゆくものを通して、告げ、顕わすことである。認識する存在、理性をもつ存在としての人間の特殊な使命、特殊な職分は、人間の本質を、人間のなかにある神的なものを、したがって神を、さらに人間の使命や職分そのものを、充分に意識し、生き生きと認識し、明確に洞察すること、さらにそれを、自己の決定と自由とをもって、自己の生命のなかで、実現し、活動させ、顕現することである。

意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己決定をもって、純粋かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である。

抽象的で難解な表現のようですが、ここでいわれていることは、普段の保育や幼児教育が日々実現していることです。ここで「神的なもの」と呼ばれているのは、生き生きと自己創造する自然＝生命のことです。そのような自然＝生命は、植物や動物や人間といったさまざまの形を取って世界に表現されます。そのなかでただ人間だけが、この自然＝生命を発展させ表現するという使命を、認識することができます。ですから、人間はその内に生き続けている自然＝生命を、自覚的に発展させ表現することができるのです。人間の教育とは、子どものうちに働くこのような自然＝生命をより豊かに発展させ表現するよう手助けすることです。

このフレーベルの教育思想には、子どもの成長と人類の成長と生命の発展とを結びつけてとらえ

ようとする深い生命観があります。それはモンテッソーリやシュタイナーの教育思想とも共通しています。

このようなフレーベルの生命観は、彼の中心思想を表す「生の合一」という言葉に集約されています。この「生の合一」についての彼の説明は、なかなか煩雑でやっかいなのですが、「生の合一」とは、世界と自分との境界線が溶けてしまい、我を忘れて世界と一体となっているような体験を意味します。少し乱暴な整理をしますと、「生の合一」というのは、これまで何度も述べたきた「溶解体験」としてとらえることができると考えます。本連載の第一回で述べた遊びも「生の合一」の一つですし、第二回で述べた子どもが動物になることも「生の合一」の一つなのです。

フレーベルは、「生の合一」をもたらすために、さまざまな遊び方を工夫しました。またさまざまな遊具（メディア）を自分で考案したりもしました。みなさんのよく知っている積み木も、フレーベル考案の代表的な遊具の一つです。フレーベル考案の遊具は、日本では「恩物」と呼ばれています。普段聞き慣れない言葉ですがGabeというドイツ語の訳語で「贈り物」という意味です。これらはいまでもフレーベル館で手に入れることができます。フレーベルは遊具の使用法について、子どもの自由な使用を認めず、厳密な規則を決めていました。ですからフレーベルの恩物は、「遊具」という言葉で連想するものではなく、むしろ「教具」といったほうがよいかもしれません。

フレーベルの幼児教育のシステムは、母国のドイツでは政府によって禁止されましたが、英米を中心に世界中に広がりました。しかし、後に遊具の形式主義的な運用について、強い批判がなされるようになりました。日本では、この『幼児の教育』の編集者だった倉橋惣三が、フレーベル主義の形式主義的な教育を批判して、恩物をバラバラにして子どもの自由な遊びにゆだねたことは、みなさんも授業で聞かれたかもしれません。

なぜフレーベルは恩物の遊び方を細かく決めていたのでしょうか。それは子どもが恩物によって、自然＝生命の法則と類似したパターンの形状を作りだすことで、自然＝生命の法則を体験し、予感することができると考えたからです。たとえば第一遊具であるひもで吊された球を使った遊びでは、子どもはその球をつかんだりはなしたりすることで、合一と分離と再合一という世界の秩序・宇宙の生成の法則を予感するのだといいます。このように、それぞれの恩物の使用法において、恩物によって作りだす小さな世界と、それに対応する大きな宇宙との関係づけが、一つ一つ注意深くなされていました。

とても不思議な思想でしょう。どうしてフレーベルはこのように考えたのでしょうか。それはフレーベルの「象徴主義」という言葉で理解されてきました。このような思考法は宗教のようにみえるかもしれません。事実、宗教にはさまざまな象徴が使われており、大きな役割を果たしてきました。たとえば、古代より球体は完全な宇宙の象徴とみなされてきました。このような象徴という思考法は、科学的な思考法から見れば不合理極まりないものにみえるかもしれません。

科学が唯一の優れた思考法であるのなら、象徴という思考法への批判は正しいといえるかもしれ

ません。しかし、科学は世界を理解する方法として唯一の方法ではありませんし、もっとも優れた思考法でもありません。私たちが他者や自然とかかわるとき、科学は世界をコントロールすることでは役には立ちますが、それはかかわり方の一つをなすものでしかありません。私たちは、他者や自然と、かけがえのない友人として、あるいは聖なるものとして、出会うこともできるのです。私たちは自然＝生命の一部をなしていますから、全体としての自然＝生命とたえず一体となることを必要としています。フレーベルの思考法は、他者や自然＝生命との生きたつながりを作る思想として今なお優れています。

私たちは自然＝生命とどのようにかかわっていくのか、そのかかわり方を幼児のときにどのように培っていくのか、このように考えると、古びたようにみえるフレーベルの思想は俄然輝きをましてきます。フレーベルの思考には、自然＝生命を日々創造的進化を続ける生きたネットワークとしてとらえるエコロジカルな思考が宿っています。フレーベルの思考の特徴は、パターンとパターンとの間をつなぐ共通するパターンを見つけて、世界を類似したパターンでつないでいくことでした。そのためにフレーベルの文体にはメタファー（隠喩）が多く用いられ、重要な役目を果たすようになっています。

メタファーというのは、異なった事物や出来事の間に同じパターンを発見し、それによってこれまで見いだすことのなかった新しい関係を表現する文学上の技法です。たとえば、「人はオオカミだ」という文はメタファーです。このとき人とオオカミとの間に、野獣的な特性を見いだし、その共通するパターンを通して両者がつなぎ合わされるのです。このとき「人は暴力的だ」というより

人のなかにある暴力的な側面が、オオカミにまつわる残酷なイメージ群によって活性化され、生き生きとして伝わることになります。詩や物語は、このメタファーによってできています。

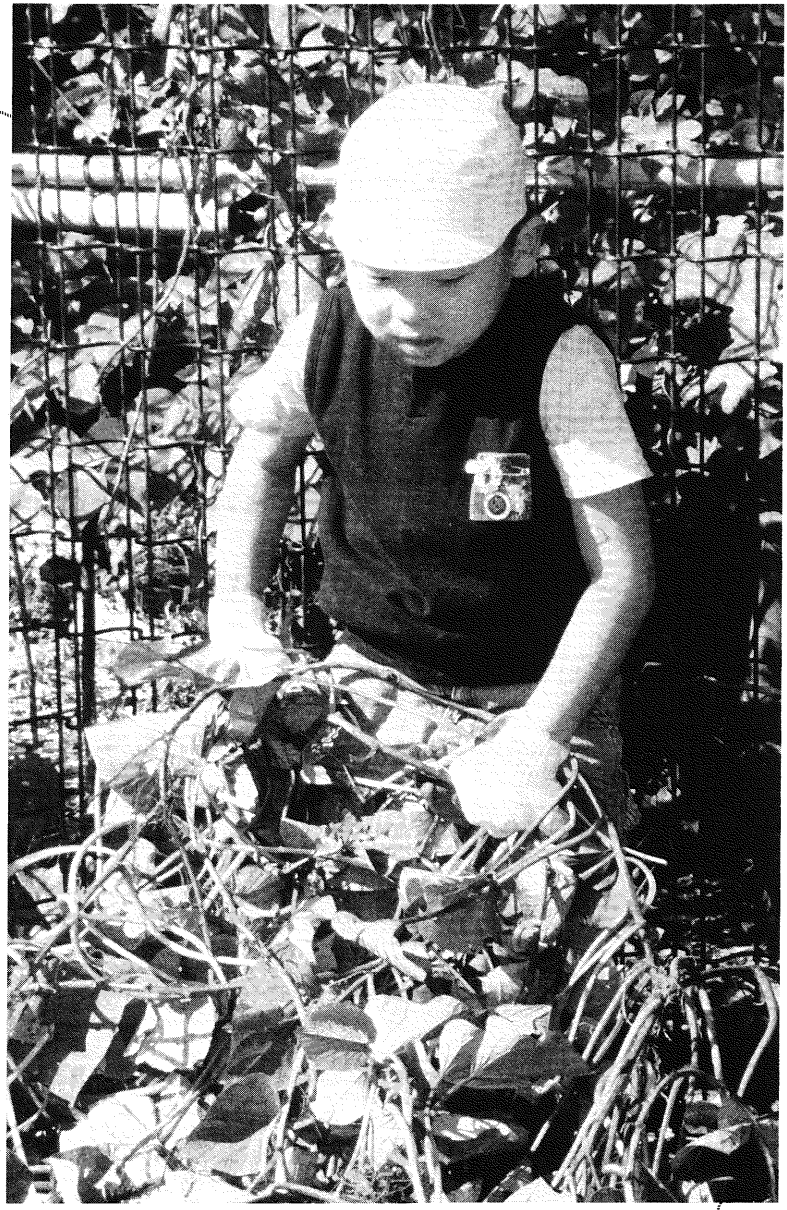
このメタファーの思考法は、保育園や幼稚園でもなじみの何かに似ていませんか。そうです。子どもの好きななぞなぞの思考法と同じなのです。中川李枝子さく・山脇百合子え『なぞなぞえほん1のまき』（福音館）から一つ。

おなかが　へると
しぼんで　しょんぼり
おなかが　ふくらむと
かるくなり
うきうき　うかれて　そらのたび

ここでは風船の空気が入ったり抜けたりする姿と、人が食事をしておなかがふくれたり減ったりする姿とが結びあわされています。風船はまるで生き物のようにとらえられています。このような表現は擬人法と呼ばれたりします。子どもはこのような思考法が大好きです。このような思考法が子どもの哲学を伸びやかに展開させていきます。大人が当たり前と思っている世界の区切り方を、子どもの哲学は軽々と越境していきます。生きているものと生きていないもの、植物と動物と人間、世界のさまざまな事物や出来事の境界線を横断し、メタファーの思考法は思いもつかなかった視点から、思いもつかなかったもの同士を結びあわせ新たな世界を作りだしていくのです。子どもの遊びが、このメタファーの思考法によって動かされているのはいうまでもありません。

〈次回に続く〉

（京都大学）



ある日

撮影・平野　清

私が通った幼稚園・保育園(5)

幼稚園で過ごした日々

―プールのシャワーが怖かった私へ―

野口　隆子

幼稚園の頃の思い出、というと、自分の中で必ず浮かび上がるイメージがいくつかある。

親も知らない、先生も知らない、私だけが知っている子どもだった頃の気持ちは、大事な思い出である。一方で、親が「あなたが幼稚園の時はね、こんなことがあったのよ」と必ず語るエピソードがある。大抵の場合、そういったエピソードは気恥ずかしくなるものが多い。大人になってから、幼い頃に関する私の記憶と親が記憶し語るエピソードをあらためて照らし合わせてみると、同じ状況でもずいぶん違って捉えているのだと不思議に思う。

親に聞いたところによると、幼児期の私は親の目から見て大人しく手のかからない子だったらし

い。私の母親は専業主婦で、育児の他いろいろなことに興味関心をもっており、友人たちと活動するのが好きだったという。近所の家で紙粘土の人形作りや造花作りを習ったり、編み物教室に行ったり、仲間と本を貸し出す文庫活動をおこなったり、いろいろなことをやっていたが、幼かった私をどこかに預けるわけにもいかず、どこにでも一緒に連れて行った。本を与えておくとずっと読んでいるし、いつも黙って何かしら〝こちょこちょ〟と遊んでいるので、邪魔にもならず、安心して連れて行ったらしいのだ。私自身、母親に連れられていろいろなところに行ったことについては、あまりよくは覚えていないのだが、嫌ではなかった。子どもの目から見て、大人たちが器用に手先を動かすことによって美しい顔をした人形や花びらといった形が少しずつ出来上がっていく様子、わいわいと楽しそうに話したりする様子を見るのは面白かった。見ることでなんとなく参加しているような気分だったのかもしれない。段々飽きてきて疲れてくると、「早く帰りたいなあ」と思った記憶はあるが。絵本はたくさん読んだ記憶がある。母親のおこなっている文庫活動と図書館に通い、家族五人全員の名前で貸し出しカードを作り、本を借りた。たくさん借りるのが嬉しく、選ぶのに時間をかけるのが楽しみだった。今でも書店に行くと妙に興奮してたくさん本を手にとってしまうのは幼少期の名残だろうか。

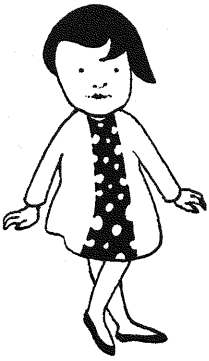
幼稚園に関する最初の記憶は、入園の時。母親と一緒に、初めて幼稚園に登園すると、先生が部屋の前で待っていた。二人の兄がいるせいか、母親は慣れたもので、さっさと帰っていった。先生に部屋に入るよう促され、ふと周りを見ると、お母さんと離れるのが悲しくて泣いている子が数人いた。それを見た時私は、「何で泣いているのか

しら、私はすぐ幼稚園になれちゃったわ」と一人で勝手に自信をもった。おそらく、私は平気よ、とにやにやしていたと思う。幼稚園に行けたということは、当時の私にとってそれだけで大きな誇りとなったのだろう。今から振り返ると、それぐらいのことでなんと生意気に、と思えるが、子どもなりに逆に心の中の不安を自信に変えることでなんとかやっていけたのかもしれない。部屋に入ると、幼稚園で使うための真新しいお道具箱、そしてかわいらしい筆箱など入園児へのプレゼントが用意されていて、その前に自由に座ればよいらしい。よくよく見ると、筆箱にはピンクと紫の二種類の色があったので、「私はピンク！」とさっさとピンクの前に座って待っていた、これが私の幼稚園入園初日の記憶だ。結構ちゃっかりしていたようだ。ちなみに、親の語るエピソードにはこの入園時の様子は全くない。大して印象にも残らなかったのだろう。

しかし、毎回毎回「あなたが幼稚園の時にね」と母親に言われて困ってしまうのが、幼稚園のプール遊びの時のエピソードである。なぜか私は、プールの前に浴びるシャワーが怖いといって、先生がどんなになだめてもプールに入らないというのである。我ながら、実にふがいない！一体、シャワーの何が怖かったのだろう？　多少残っている記憶をもとに振り返ってみる。確か、みんなと一緒に水着に着替えて、腰までつかる消毒液の中を歩いて、そこまではできたのだが、さあ、次はシャワーだという時に、体が凍ってしまったのだ。おそらく、向こう側もよく見えないぐらい上からものすごい勢いで落ちてくる水しぶき、その中を通って行くのが怖かったのではないだろうか。おかしなことに、母親はすごく驚いたらしい。当時幼稚園で仲間と役員をしていた母親

は、プールに入れないという我が子の様子を聞いて、園長先生に「無理に入れさせるのではなく、子どもが納得して自分で入りたいというまでそのままにしておいてください」と子どもの意思を尊重して待ってくれるようお願いに行ったという。しかし、それから結構長い間、私はプールサイドにいて、泳いでいるみんなを見学することになった。

母親は待った。待ったが、あまりに長いので、プールの時期は終わってしまう。ついに根負けして、また園長先生のところに行き、「どうぞ園のほうにお任せするので、好きにしてください」と言ったという。そんなことがあったとは露知らず、母親の二度のお願いの間、私はプールを見学していた。特にその間の記憶は残っていないが、無理に入れられて嫌な思いをしたという記憶もないので、先生方も辛抱強く待っていてくださったのだと思う。ここからは私がおぼろげに覚えていることなのだが、ある日、今まで見ていただけだった私に先生は「水着に着替えてみない」と提案し、あっという間に着替えさせると手をひいてシャワーの前まで行った。その時、いつもと何か違うな、妙だな、という雰囲気を子ども心に感じてはいたものの、特に嫌な感じはしなかったのを覚えている。しかし、やはりシャワーの前でつと止まってしまった。すると先生は私が抵抗する間も考える間もなく、ぐいっと手を引いて私をシャワーの中に引き入れたのだ。その瞬間、私はシャワーを浴びてしまったのだが、「あれ？」と思った。「なあんだ、大丈夫じゃない」と。それまで



頑固に抵抗していた私は、その時ちょっと恥ずかしく思った。その後は、みんなと一緒に、喜んでプールに入った。シャワーも怖くないし、プールに関して嫌な思い出は全くない。

この時のエピソードを、母親は「あの時は役員もしていたし、教育熱心なあまり主張してあんなことを言ったけれど、若かったな、先生に迷惑をかけた」と毎回反省とともに恥ずかしそうに語る。このエピソードを聞かされる私も実は恥ずかしい。最近私は実習の巡回指導で幼稚園や保育所をまわり、先生と世間話をする機会が多い。すると、「最近の親御さんはこうしてくださいと強く主張を言われることがあって」困ったことがあったという話をたまたまうかがったことがあった。地域や時代背景も違うし、個々の主張の内容まではおうかがいしなかったが、多かれ少なかれ実は私の親もそんなことを言ってしまった時があったようです、と心の中で思い、冷や汗をかいてしまった。先生の立場を想像してみると、もし私の母親のように「うちの子はこうしてください」と強く言われたら、任せてくれてもいいのになと思うだろう。今思えばなんでもないシャワー、怖がっていたのは私一人である。それに大真面目に取り組んでくれた母親、真摯につきあってくださった先生方、反省するとともに迷惑をかけた方々に感謝しなければならないようだ。シャワー一つがちょっとした〝事件〟になり、その後数十年も語られようとは。子どもというのは、自分のことではあるのだが、大人が思いもよらないことを感じ考えている。

幼い頃の私の抵抗は何度かあったようだ。例えば、注射。親が言うには、注射に連れて行ったら、「嫌だ！」とものすごく抵抗して、会場だった体育館中を走って逃げ回り、つかまえるのに難

儀したという。全く覚えていないので非常に恥ずかしい。自分が親だったら、他のお子さんは大人しく注射を受けているのに、我が子は泣き叫びながら走り回りそれを必死に追いかけなければならないというのは確かに嫌だ。エピソードを聞かされるたび、当時はご苦労をおかけしました、と申し訳ない気分である。しかしその後、私は注射の時に怖くなくなる方法を発見している。針がささる瞬間を見ないよう、注射の間は首を後ろに向けていればそれほど痛くないのだ。大人になった今では、注射や採血の針のささる瞬間をじっと見ている。そういえば、怖かった時もあったんだなと思いながら。

こうして考えてみると、私や親の記憶に明確に浮き上がってこないだけで、様々な大小の〝事件〟はたくさんあったのだろう。幼い私は私の一部のようでもあるが、実は全く私ではないようにも思われてくるのが不思議だ。遠い昔のようでもあり、つい最近の出来事のようでもある。印象深い思い出というのは人との語りを通して再構成され、時間を超えて体現される。何度も思い出して暖める記憶、思い出したいのに思い出せない記憶、忘れたいのに忘れられない記憶、全く忘れ去ってしまった記憶。記憶は時に自分の思うようにならないのが厄介だ。しかし幼稚園で過ごした日々には、恥ずかしながらも優しい思い出がいくつかある。プールのシャワーが怖かった私へ、一言言いたい。あの時、またその他いろんな場面で周囲の人に迷惑をかけたけれど、そんなあなたに真剣に接してくれた人がいたのですよ。願わくば、そこから何かを学んで子どもの思いがよくわかる人になっていればいいのだけれど。幼稚園に行くと、幼稚園で過ごしたあの頃の私が見える。

（十文字学園女子大学）

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(7)

「犬とすいか」の巻

庄籠（しょうごもり）　道子

もうすぐ夏休み。楽しみやな。今日もプールに入って楽しかった。

帰る時間になった。リュックサックを背負ってくつをはきかえた。はきかえた子から園庭に並ぶ。村ごとに並ぶ。三人組も並んだ。当番のお母さんが迎えに来て、連れて帰ってくれるのだ。

どっちが先に並んだかきみなりとかずがもめている。

あれ？　お迎えのお母さんたちの様子がいつもと違う。いつもは門の外でたむろして待ってるのに、きょうは、みんな中に入ってきた。そして大騒ぎして門を閉めている。

あ、犬だ。お腹をどろんこにした茶色い大きな犬が道のむこうから走ってくる。お母さんたちは「いやー！」とか言いながら園庭に入って、あわてて門を閉める。大きな犬は門のむこうをうろうろしている。

当番の子がみんなの前に立って「帰りのごあいさつをします」と言った。みんな「さようなら」と言った。言いながらも大きな犬が気になってしかたない。大きな犬を見ながら、お迎えのお母さんやおばちゃんの所に行った。

どろんこの大きな犬は門のすぐ外にいる。大きな口から、大きな舌を出してハッハッハッと息をしている。よだれがたれている。子どもたちの背丈と同じくらいだ。

大きい。犬は門から離れない。みんな怖くて出られない。

まきが泣き出した。ん？　まきの家は、幼稚園の裏だ。裏門から出る。この大きな犬のいる門は通らなくていい。何で泣くんやろ。

「犬と言えば……籠先生！」

と、竹田園長先生が言った。籠先生は、家に犬二匹と猫三匹を飼っている。

「はい。園長先生、ロープか何かありますか？」

籠先生が聞いた。

「教材庫にあるはずや」

籠先生は、走っていって、太いロープを持ってきた。

籠先生は、太いロープを持って、門に近づいた。子どもたちも、お迎えのお母さんたちも見ている。三人組もそっと近づいて固唾を呑んで見守った。

籠先生が門のこっちにしゃがむと、門の鉄の棒をはさんで大きな犬も門のむこうに座った。

座った丈は同じくらいだ。

「ひえー、大きい！　し、しかし、ここでめげては保育者としての面子がすたる」

籠先生は何やらぶつぶつ言いながら緊張した顔をしている。

「えーと、い、犬は、上から手を出したらたたかれると思うから、し、下から、下から……」

籠先生は、ぶつぶつ言い続けながら、そおっと手を、門の鉄の棒と棒の間から、犬の顔の前に出した。ハアッハアッハアッ……犬の荒い息が聞こえる。

あっ、かまれる！　りょうたは思わず目を閉じた。

でも、籠先生の悲鳴は聞こえなかった。そっと、りょうたが目を開けて見たら、大きな犬は籠先生の手をべろべろなめていた。籠先生がほっとした顔をしている。

籠先生はその手で、大きな犬の頭を撫でた。そして、ロープを首に巻いて結んだ。

「つなぎました。もう大丈夫です」

籠先生が門を開けた。まきが泣き止んだ。

「おとなしい犬です。どないもないです」

籠先生は言った。どないもないなら、なんであんなぶ

つぶつ言ってたのかな。三人組は顔を見合わせた。でも、よけいなことを言って怒らせたらえらいこっちゃ。三人組はりょうたのお母さんの後ろについて帰った。他のみんなも村ごとに帰って行った。

「田んぼに入って遊んだんやねー。どろんこやねー。あろちゃろなー」

籠先生が犬を足洗い場に連れていくのが見えた。

さて、翌日のことである。

園庭でみんなで遊んでいたら、幼稚園の門の前に車が止まった。中からおじさんが出てきた。おじさんは、先生たちに話しかけた。

「きのうは、うちの犬がご迷惑をかけまして……」

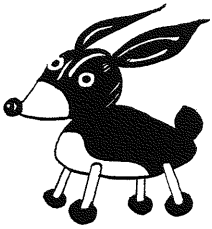
「あら、お宅の犬だっんたですか？」

「へえ。もうおばあさんの犬でして、おとなしいんですけど、なんせ身体が大きいやろ。幼稚園の子らを怖がらしてしもうて。」

「いいえ、いいえ。かしこい、おとなしい犬ですねえ」

籠先生が答えている。あんなに恐る恐る手を出したことは、もう忘れたらしい。

ぼくたちが帰ってから、先生たちは夕方まで待ったけど、だれも犬を探しに来ないので、たけのこ村の駐在所に連絡したらしい。おまわりさんは、保健所に連れて行き、このおじさんが保健所に捜しに行って連れ戻したらしい。罰金を取られたとおじさんはちょっと残念そうにぼやいた。それから、おじさんは先生たちに聞いた。



「そうそう、すいか、いらんかね？」

「すいか？　いります。よろこんで！」

間髪を入れず竹田園長先生が答えた。

「そうか。ほな、ちょっと取って来るわ」

おじさんは、車に乗って帰っていった。

それから、お昼のお弁当を食べて、また遊んで、そろそろ帰ろうかと片付けて部屋に入ろうとしていると、門

の前に車が止まった。さっきの犬のおじさんである。
おじさんは、先生たちに、
「門　開けてか。車、中に　入れるで」と言った。
すいかのひとつくらい、かかえて持ってきたらええやん。このおじさん、腰でも悪いんやろか。それとも、かかえきらんくらい大きなすいかやったりして……。
「みんなー、車が入ってくるから、庭に出たらあかんよー。**もも**ちくん、早う、くつはきかえて廊下にあがっておいで」
竹田園長先生の言葉に、みんなは廊下で犬のおじさんの車が入ってくるのを見ていた。
車はぐるーっと園庭を回って、みんなの前にバックしてきた。犬のおじさんは、車から降りてきて、後ろのトランクを開けた。みんなトランクが見える所に寄ってきた。
「はいよ」
「えーっ！」
「うわー！」
「うそーっ！」
子どもたちも、先生たちも、口々に叫んだ。
犬のおじさんの車のトランクには、大きなすいかがごろごろと並んでいた。一、二……数えたら七個もあった。丸いすいか、楕円形のすいか……どれも、人の頭より、ずっと大きい。
「この丸いのは中が黄色や。このちょっと長いのはまくらずいか、言うねん。中は赤や」
「えっ？　黄色いすいかって、普通、小さいですよねー」
籠先生が聞くと、
「はっはっは。わしが作ったのは大きいんや」犬のおじさんは、うれしそうに笑った。
先生たちが、すいかをトランクからおろした。子どもたちが手伝おうとすると、
「あかん！　落として割ったら食べられんようになる」と、言って、手伝わせてくれんやった。
「ほななー」
おじさんが乗って帰る車の後ろに、「ありがとうございました」と、先生たちは何度もぺこぺこお辞儀をし

た。子どもたちは盛大に手を振った。

翌日、三人組が幼稚園に来てみると、廊下に大きなたらいが出してあり、そこに大きな丸いすいかとまくらすいか一つずつが入っていた。そして、氷水がたっぷり入っている。すいかを冷やしてるんや。うわー、冷たくておいしそう。たらいの横には、丸い大きなすいかが二つ。

「一、二、三、四。あと三つは、どないしたんやろ」

「籠先生が、きのう、僕らが帰った後、食べたんちゃうか」

「えー、三つとも、ひとりでー!?」

三人組がいろいろ推理していると、籠先生がやってきた。

「おはよー。きょうは、すいか割りするでえー!」

籠先生は、ごっついはりきってる。

「先生、あとの三つのすいかは?」

としなりが思い切って聞くと、

「ああ、たけのこ小学校に二つ持っていって、たけのこ保育所に一つ持っていった。どっちでも大喜びされたで」

ああ、なるほど。

すいか割りは、もちろん盛り上がった。すいかを前に竹の棒を持たされて手ぬぐいで目隠しをされる。竹田園長先生が肩を持ってぐるぐると二回まわす。「はい、どうぞ」

先生やみんなが、

「右や」

「違う、左に三歩」

「あー、行き過ぎた。戻って」

とかいろいろ言ってくれるんやけど、えーっと、右ってお茶碗の方だっけ? おはしの方だっけ? とか考えてるとますますわからなくなり、なかなか当たらない。それでも、何回もやって、すいかは割れた。割れたすいかはうさぎに食べさせて、みんなでたらいのすいかを食べた。冷たくてめちゃめちゃおいしかった。

(保育研究グループ　はるにれ)

子どもの写真に見る大人の眼(3)

―子どもに託されたものから―

荒川　志津代

カメラマン長倉洋海は、一九八九年エル・サルバドルに入国しようとした時、ジャーナリストであることを警戒され、入国を拒否された。仕方なく陸路で、グアテマラからバスでの入国を目指した。その時のエピソードである。「ボクは戦争を撮る気はないんです。ほら、子どもを撮っているんです」と言って、自分が撮った子どものポストカードを、国境のイミグレーション・オフィスの係官に見せた。すると、厳しい顔付きだった係官の表情が急になごんで、「七日間有効」の入国スタンプを押してくれたという[1)]。

ここでの係官にとっての子どもという記号の意味は、多くの人に共有されているものであり、長倉はそれを利用したのである[2)]。今回は、広く人々の目に触れる写真から、子どもの写真のメッセージ性や、象徴あるいは記号としての子どもについて考えてみ

たい。

一・無心・純真・天真爛漫

長倉が利用した子どもの記号とは、無心・純真・天真爛漫のようなものであったといえるだろう。現在市販されている子どもの写真集の多くが、子どもをこのように捕えているように見える。小さな身の丈で相対的に大きな頭部といった体型だけで、子どもは大人との異質性を示してはいる。しかしカメラマンが捕獲したのは、大人の笑みとは何か異なる彼らの笑顔、単に大きいと形容するだけでは不十分なまっすぐな瞳、大人になっては滅多にしない表情やしぐさ等の総体である。

江戸末期、カメラが日本に入った頃の子どもの写真は、こうではなかった。島津斉彬撮影と伝えられてきた「姫三人」にしろ、幕末の写真師上野彦馬が撮った子どもにしろ、髪型や衣服にある種の徴をもつ場合はあったにせよ、その意味を理解しないものにとっては、彼らはただの小さい人であるように見える。大正期の富裕層の子どもたちは、特別な子どもらしい衣装や小道具に囲まれて写真撮影されていた。それらによって子どもらしさを演出されていたが、それら道具立てを剥がしてしまえば、ただの小さな人だった。

躍動する瞬間や、「子どもらしい」といわれる表情を熱心に捕獲し出したのは、昭和初期（写真1）であるように思われる。小道具が無くても、「裸ん坊の子ども」が「子どもらしく」見えるような映像が現れ出した。カメラや撮影技術の進歩が影響しているとともに、捕獲する眼自体が変わってきたのだと考えられる。そして戦後、「おてんば」や「ガキ大将」を含め、「無邪気な子ども」が、子ども写真の大きな部分を占めている。

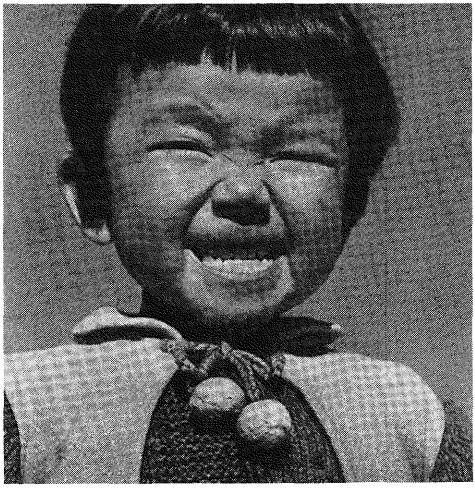
現在、子どもの映像は新たな捕えられ方もされつ

つある。しかし近代的子ども観の反映として、映像として明確に示されるようになったこの像は、今でも大きな流れとして息づいている。

二．悲惨さの象徴と告発

一方子どもは、しばしば、飢餓や災難、戦争といった場面で、被写体になることも多かった。例えばピュリッツァー賞を取った「ハゲワシと少女」に代表されるようなものである。これは、ハゲワシが飢えて瀕死の少女を狙っているもので、まずは子どもを救うべきであった等、カメラマンが非難もされた。目を覆いたくなるような、悲惨さをそのままに伝える写真である。日本における太平洋戦争下の写真集でも、子どもを犠牲者として位置づけた悲惨な写真が多く収録されている。世界中を見れば、有名なものだけでも、子どもを被写体としたものが相当数ある。それら多くの戦争写真の中には、悲惨さを伝えるだけに止まらず、戦いやそこでの非道な行為への告発というメッセージを強力に感じさせるものがある。

例えば中村梧郎の、ベトナム戦争での「作戦で枯れたマングローブ林とフン少年」の写真[3]である。枯れた根元が立ち並ぶ林に、ぽつんと裸の少年が、泥



▲写真1　『子供の写し方』
（石津良介著，アルス，昭和12年発行）より

の中に立っている。この写真は、子どもがいることによって、枯れ木だけとは異なる印象を与えている。このような状況の中で、生き続けなければならないことの悲惨さを、表現しているようにも見える。また写真だけを見れば、枯れ木の未来における再生を、示唆しているようにも取れる。しかし次のページには、十九年後のフン青年の写真がある。「全身のマヒ症状が進んで会話も困難になっていた」と説明がついている。作戦はその時被害を与えただけでなく、そこに生活し続けざるを得なかった人々に、その後も影響をもたらし続けたのである。それを知ってもう一度あの写真を見れば、林の中のフン少年は、あの作戦への告発者である。

子どもは無邪気で罪が無いという前提ゆえに、また私たちが彼らに未来を託しているゆえに、悲惨さの象徴や告発者として、子どもに強いメッセージ性が負わされるのだろうか。

三．無邪気と悲惨の反転

イメージとしての子どもの無邪気さは、彼らに告発者としての位置を与える一方で、事態の認識を軟化させるように働くこともある。

例えば、戦争などの悲惨な状況であるにも拘わらず、明るい子どもの姿が撮られることも多い。難民キャンプなどで、精一杯元気に明るく笑っている子ども、といった写し方である。このような場合、写真を見る私たちは、写真の背後にある悲惨な状況を、ある程度理解している。従ってこのような明るい写真からも、裏返しとしての悲惨さの告発を感じることもある。だがそれよりも、苛酷な状況の中の明るさに、救われたりもするのではないだろうか。

報道写真となると、時として安易に、子どものそんなアンビバレントな記号が利用されもする。最近

のイラクからは、可憐な少女と兵士という不釣り合いな二人の写真（写真2）が届いた。子どもが居合わせることが当然とは思われない場面に、通常の様子の子どもがいることは、たとえ写真だけでもニュースではある。だがこの取り合わせが、結果的に、どんな印象を与えることになるのだろうか。

「メディア戦争だった湾岸戦争」という文[4]の中で新藤健一は、「発表された写真は、ウッカリするとプロパガンダに利用されかねない」と警告する。戦いの中の子どもは、悲惨さを象徴するとともに、希望を託される部分もあり、その両面をもつ子どもの強力なメッセージ性、記号性は、事態への印象を、随分と変化させるものだと思わされる。

四．平和・可能性・未来

子ども写真は、広告の中でもしばしば使われる。子ども写真がどのような商品で使われているかを、

▲写真2　The Japan Times（2005年4月9日）より

一九四九年から一九九五年までの新聞広告の中で、カウントしてみたことがある。[5] 結果は、子どもはほとんどの商品で使われており、それぞれの時代の新しい商品に、ほとんど必ず登場するというものだった。そこでは子ども写真は、子ども向け商品や家族向け商品ということをアピールするためだけでなく、新しい商品が登場するたびに、何らかのイメージを喚起するために使われているといえた。そしてその多くは、未来や可能性や平和といったイメージである。

例えば、鮮烈な印象を残したものに、「じぶん新発見」のコピーでも有名になった、幼児水泳を撮った西武デパートの広告（一九八〇年、ポスター及び新聞）がある。みずみずしい生命力を感じさせ、「テーマ」ではなく、「感動」を表現していた。これから何かが起こるぞという予感を感じさせるような写真だった。また子どもは、イメージのソフト化のためにも使われていた。例えば通信事業の広告（一九八二、日本通信工業）に登場したりした。「少年は一本の針金に乗って飛ぶことができる」というコピーがついていたが、これは、子どもに可能性を託すという子ども観を背景にしていると言えるだろう。

一九七〇年代以降、子どもが最も安定的に広告に使われる領域の一つが、家や土地であった。今年二〇〇五年四月分の新聞広告でも、家の広告に最も多く子どもの姿が見られた。不動産及び金融・保険さらに車の広告に、子どもはしばしば家族の一員として登場するが、彼らは商品をソフト化する役目とともに、安定・未来といったイメージを負わされているといえるだろう。さらに、平和な家族というイメージとも結びついていると思われる。写真3は、公共広告機構の広告（一部分）である。家族機能の崩壊が指摘されている今、これらの映像は、ありた

い家族の夢として、より機能すると言ったら皮肉だろうか。

以上、四つの観点から、子どもに託されてしまった徴、記号を見てきた。子どもは、時代や社会の中で、安易に徴づけられ、利用されているようにも見える。私たちは、アプリオリな子どものイメージに、もう少し用心深くなる必要があるのかもしれない。

（名古屋女子大学）

▲写真3　AC公共広告機構
2005年6月　新聞広告より

引用及び参考文献

1)長倉洋海『フォト・ジャーナリストの眼』（岩波書店、一九九二）、二―四頁
2)山下恒男・荒川志津代「『戦争と子ども』写真についての一考察」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第46号、一九九七
3)中村梧郎『グラフィックレポート戦場の枯れ葉剤』（岩波書店、一九九五）、一八―一九頁
4)「報道されなかった湾岸戦争」写真集編集委員会編『報道されなかった湾岸戦争』（影書房、一九九二）、二頁
5)荒川志津代・山下恒男「広告・宣伝写真の中の子ども（2）」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）』第45号、一九九六

児童学からの出発

地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(2)

お話　小川　清実

親が「ぽそっ」という一言を大切に掬い取る

小川　『ぴっぴ』にいらしているお母さんは、こういう場所があると、保育士が「何もしない」でも、本当に親子で変わっていくの。「何もしない」というのは、直接的に「こういう子育てがいいですよ」というアドバイスを一方的にしていないという意味です。ただ、お母さんのほうから、ご相談というか……、多分、ご相談という気もないわね。「最近、こうなんだけど」とか、「この間、お医者さんに行ったら、こう言われたのだけど」とか、「ぽそっ」と言って下さる。

例えば、間もなく一歳になる子がいて、「お医者さんに、もう母乳だけじゃなくて離乳食を始めないと、ビタミンが足りませんよって言われたんですよね」と。「えっ、ほかのものを、まだ何も食べさせていないの?」と聞くと、「はい」とか言うわけ。(笑)「歯、生

えているでしょう？」と聞くと、生えているの。「果汁を薄めたのは？」「あげても、べって出しちゃうし……」。だから、一日に十何回も母乳をあげてるのですって。ちょっとそれは……。（笑）「ええっ？」って、こちらがびっくりするようなことが、実はいっぱいあるの。

もう一歳になるのに、子どもを一度も床におろしていないという親がいる。つまり、ずっと抱っこしているの。それで、その子の足が、障がいもないのに、ぷらんぷらんなの。

――はいはいもしていない？

小川　していないの。はいはいの大切さとか、離乳食で口を使うとか、そういう大切さというのは、多分、知識ではあると思うけれども、もう一方の知識があるのよ。例えば、母乳はいいとか。それに、けがをさせたくないという心配もあるのね。そういうことで、どうしてずっと抱っこできるのかわからないけれども、しているの。見ていると、じゅうたんに座ったら、子どもをじゅうたんにおろさずに、やっぱりひざの上にのせちゃうわけ。

――子ども本人も動かない？

小川　動こうとしない。

――どうするのだろう？

小川　そうなの。とっても大変なことでしょう。でも、親にそうは言えないから、例えば、食べさせていないという親には、「歯も生えているし、口で噛み噛みすると、脳への刺激があるから、離乳食を始めたほうがいいかもよ」とか言うわけ。そうすると、もう離乳食を始めている、同じぐらいの子どもをもっているお母さんが、「やっぱり朝晩は何かお腹に入れておくと、そんなにおっぱいを飲ませなくていいから楽よ」とか、言ってくれるの。一日十何回も母乳をあげていたら、参るわよ。子どもだって、十分に育っていかないでしょう。そのお母さんは「ああ、そう」と、聞いている。それでも、すぐに離乳食を始めるかどうかわからない。

親が自分で決められるように支える

小川　こういうことって、焦っちゃいけないのね。小児

栄養の本を見ていたら、離乳を始めるのは「親の意識次第」だという事例が載っていた。親が始めようと思えば、始まると。だから、私が次にそのお母さんに会ったときに、親の覚悟次第だという事例を出して、「ここに、こんなのが書いてあるわよ」と、見せたら、「ああ、そうですか。覚悟ね」と言って。そうしたら、その次に会ったときに、「始めましたよ」と、言ってくれて。（笑）

だから、お医者さんが「ビタミンが足りないよ」と言っても始めないの。今、そういう親たちなのね。今のお母さんたちって、「何がいいですよ」というのは、お医者さんが言うことで、「それをそのまま信じようとは思わない」のね。

――医者を信頼していない？

小川　信頼していないというか、「でも、まだいいじゃない？」という……。今、情報が本当に過多でしょう。いろいろな意見を言う人がいるわけでしょう。

ここの保育士さんや教員スタッフに私が言っているのは、「絶対にこうしなさいと言っても、親は聞かない。自分の子育てのやり方は、親が決めていかなきゃいけない。だから、決めていく、そのちょっとしたプッシュ、そういうお手伝いをしてあげるだけでいい」ということです。

今のお母さんたちには、もう情報は十分だから、あえてこれ以上要らないと思います。親が、そういうふうに、「ぽそっ」と言うのが、実はすごく大事で、「ぽそっ」と言っているけれども、もしかしたら、ずっと考えていることなのかもしれない。ずっと考えていて、でもお医者さんにも相談できないし、お医者さんから言われてはいるけれども、相談しない。保健所の保健師さんにも、特に相談しない。日常的には、相談しないでずっときてしまっているわけでしょう。

人との関り方を学ぶ出会いの場

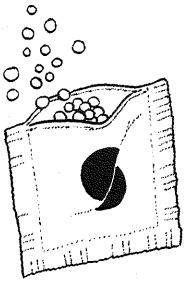
小川　けんかをさせられない親もいます。「うちの子、すぐに手を出しちゃうんです」ってすごく悩むお母さん

がいる。自分の子ども、二歳になったばかりの男の子なんだけれども、(他の子のことを)遠くから見ているの。その子は人との関り方がわからないのね。別の親子が絵本を読んでいると、ドンって、間に割り込んできちゃうの。何も言わずにドンと入っちゃう。そうするとびっくりするけれども、「見るの?」と声をかけられて、一緒に見せてもらう。あるいは、もうちょっと小さい赤ちゃんとその親が、積み木を重ねて楽しんでいる。そこへ行って、自分がドンと壊しちゃうの。(笑) 本当に関り方を知らなくて、そうやって邪魔ばかりしている。だから、「とても公園にも連れていけないです」と、お母さんがいろいろ悩んでいるの。

そのくせ、「うちの子は六つもおけいこ事をしているんです。おけいこ事のところでは、とてもいい子なんです」と言うわけ。「何をやっているの?」と聞いたら、「音楽教室、モンテッソーリ、その他いろいろで六つ」。「忙しいわね」って言うしかない。そんなことをしているから、どうやって人と関っていいかわからないのよと、直接は言えない。

その日、やっぱり邪魔ばかりしているから、同じような子どもに頭をボカンとやられたの。その子が泣いたのね。泣いてお母さんのところにくっついた。(母親に助けを求めて甘える)体験は、それが初めてだというの。「でも、こういうやり取りがあって、ほかの人間がいるということを学んでいくわけだから、恐れずに、とにかくここへいらっしゃいよ」と、言うしかないでしょう、おけいこ事をやめなさいとは言えないから。

その方は何回も来て、だんだん変わっている。親も変わってきた。親は子どもと遊べないの。「お母さん、絵本を読んでほしいのかもしれないよ」とか言って水を向けるけれども、自分の子どもを眺めているわけ。それで



「やっぱり親子の信頼関係って大事ですね」って言葉では言ってくる。「コミュニケーションって大事ですね」って。「そうね」と……。

――　情報過多の世の中で知識としては入っていても、それが自分のものになっていかないのでしょうか。

小川　そう。でも六つのおけいこに行かせて、よく育てたいのよね。そのお母さんは私に会うたびに、「最近、慣れました。子どもがやっつけられていても、それも大事と思うようになりました」なんて言ってくれる。時々いらしているから、このまま何の経験もなく幼稚園に行かれたら、このお子さんは大変だったと思うけれども、ああ、よかったと……。

だから、とにかくいろんな親子が『ぴっぴ』のような場に参加してくれるということ、それも強制でなくて、いつでも誰でも歓迎という場になっていないといけない。だから、保育士さんたちも、どういう状態の人が来ても、いつもにこにこして、そのままを受け入れていく。

家にずっといてビデオとテレビしか見ないお子さんも、おばあちゃんが連れてみえた。でも、それは本当によかったと思った。もう三歳にもなるのに、言葉が出ないの。でも、少しずつだけれども出てきている。だから、いろいろな子どもがいることは大事だなと改めて思いました。

――　いろいろな出会いを通じて親が無意識に学んでいけるような主体性を維持し続けるというのがひとつの課題でしょうか。

小川　そうそう。絶対に「教えてあげるわよという姿勢はだめ」なの。「一緒に考えていこうねというような姿勢」。

事例認識の効用

小川　だから、一度も床におろされていない子は、はいはいできるように、とにかく床におろしてもらわなきゃ

いけない。そのためには、ただ言葉で言っただけでは実行して下さるかどうか、心配なわけ。ところが、ここで同じくらいの月齢の子が、もうはいはいしていたり、歩いていたりするのを見ると、親は、「はっ」とするでしょう。親が床におろそうと思わなければ、その子は、自分の足ではいはいするチャンスもないわけだから。言葉だけではなくて、こういうふうに実際を見るということがすごく大事で、そのことを私は、昔から「事例認識の効用」と言っているのだけれど、事例をいっぱい知れば知るほど、親というのは、子育てにおいて安心できる。

そのかわり、悪い事例もあるわけです。悪い事例は悪い事例で、それを見るのも大事だと思うの。私は、ああいう親にはなりたくないなと、もしかしたら思うかもしれない。だから、いい事例だけでなく、とにかく、事実をたくさん知っていくことが親の安心感になる。親子がどういう様子で遊んでいるかというのを見て、自分はどう関ったらいいのかと学んでいける。

例えば、「子どもと全然遊べない親」もいる。それから、「どうして親が子どもと遊ばなきゃいけないのですか」と聞く親もいる。（笑）赤ちゃんのときは、かわいくてずっと抱っこしていたけれども、その子はもう二歳で、どんどん自分で遊んじゃうから、「もうつまらない」という親もいる。「あまり見ようともしない」という親もいる。

「子どもを知る」うれしい発見の場

小川　『ぴっぴ』は、「親が子どものことを見ていてね」というのを一番お願いしています。「見ていてね」というのは、ただ危なくないように見ていてねというのもあるけれども、「子どもが、今、どうしているか」ということです。自分の子どものことを見るということは、家にいると、あまりしないのね。家事をやっちゃうから。だから、ビデオを見せたり、遊んでいなさいと言って、片づけものをしちゃう。

そうじゃなくて、ここでは「どうぞ見ていてください

ね」というのは、子どもがどんなことをしているかというのが、見ていると何となくわかってくるからです。もちろん危ないときに補助をするというのも必要だけれども、「うちの子がこんな小さい子と遊んでいる」とか、「うちの子って、こういうことができるんだ」という発見にもなってくれる。これは、親が意外にうれしいことのようです。

例えば、ほかの子どもと物の取り合いをした場合、一歳代の物の取り合いなんて、全然取り合いにもならないでしょう、「あ、持っていかれた」ぐらいでしょう。どうっていうこともないけれども、二歳ぐらいになると、ちょっと抵抗するでしょう。でも強い子は取っていく。そうすると、強くて取っちゃったほうの親は、「どうして取ったの?」という関りで見るし、取られちゃった子は、親が見ていないと、親のところに行く。そうすると、「今まで、うちにいても私に助けを求めてこない子が、助けを求めてきた」ということで、「かわいいわ」という感情がわいてくる。

だから、『ぴっぴ』へ行ったら、「こういうふうにちゃんとしてなきゃいけない」というのじゃなくて、「とにかく自然に、家にいるのと同じような親子でいい」わけ。そして、お母さん同士が仲良くなって、ここに来るだけじゃなくて、家が近ければ行き来してほしいなというのが願いです。別の言い方をすると、いつもここに来てほしくないのね。勝手に卒業していってちょうだいな、というのが最高の願いなのね。

絶対的な安心感が育む親子の関係

小川　二歳を過ぎた女の子が、親がすぐそばにいないと、ものすごくギャンギャン泣くの。どうしてかなと思ったら、そのお母さんが、「実は昨日、子どもをちょっと預けたのですよ」と。もっとも午後三時ぐらいになったら大分落ち着いて、親が少し離れても全然平気になったけれども、それまでは、そばにいないと、すぐに「ママ!」って。それに対して「ママはここにいるよ」と。

ここの「ぴっぴ」の部屋の中は、「ママは絶対にいるという安心感」が子どもにあるから、子どももすごく安定しているの。絶対にどこへも行かない。トイレに行くのも、ママと離れたくない子は、行けるようにキーパーもあるし、絶対に離れないというのを子どもはわかっていますね。だから、泣いているときに、「『ぴっぴ』に行くよ」と言うと、泣きやむんですって。

――　ちゃんとそばにいて、自分と向き合ってくれる。

小川　そう。だから、親が自分と関って遊んでくれるというのが、子どももわかってくれている。つまり、それだけ家では関っていないの。それは、お母さんたちも言っていますね。家だと、何か忙しくて子どもと関れないけれども、ここは家事をすることはないから、「この時間は、ゆっくりと自分の子どもと関れる」と。それから、あるおばあちゃまがおっしゃったけれども、「ここにいると、孫に優しくなれる」と。だから、親もそうなのかもしれない。優しくなれる。子どももわかっているから、『ぴっぴ』は楽しいところになる。親やおばあちゃんが関ってくれる、とにかく一緒に遊んでくれて、親子でままごとをしていたりするわけ。

父親とやっていたりもするの。なかなかいいものです。土曜日は父親が多いし、普通の日でもみえる方があります。あのお父さん、子どもと遊んでいないように見えて、遊んでいるわと。そんなに堂々とはやらない。ちょっと恥ずかしいらしくて、ちょこちょこと遊んでいるの。(笑)ああ、遊んでいると思ったり、今日は奥さんが仕事に行っていますといって、ご主人が子どもさんを連れてきたり。いろいろな形で、子どもにとって『ぴっぴ』がうれしいところになっています。〈次号へ続く〉

(東横学園女子短期大学)

聞き手　首藤美香子

編集後記

先日午後三時前に、私の住む都内S区のセキュリティシステムから、「緊急通報」メールが携帯電話にはいりドキリとした。地図に円で示された範囲内で「小三の男子児童が助けを求めています」というのだ。直後に「誤報」だったとの追伸が届きほっとする。娘の小学校では最近、「不審者」に遭遇した場合などに、PHS機能のついた防犯ブザー（通称まもるっち）で保護者や近隣の協力者に通報できるシステムの試用を始めた。登録した保護者二名と子どもの間での通話や、子どもの居場所確認などもできる。「不審者」をめぐる事件や噂が絶えない中で、親としてある安心感は覚えるのだが、危険に遭遇してしまうことじたいは防ぎきれないというジレンマが残る。かといって、子どもをずっとひざの上に置いておくことはできない。

『ぴっぴ』の小川先生のお話によると、歯も生え始めているのに母乳だけを日に十回以上も与えられている子ども、抱っこばかりで足が萎えたようになっている一歳の子どもがいるという。「手をかけた」育児をしているといえなくもないけれど、同時に子どもが新しい世界に出合う機会を制限し、文字通り大人の胸の中で子どもを窒息させそうになっている図である。「まもるっち」ですぐ我が子の居場所を確認できるのもいいのだけれど……。

（浜口）

●本誌のご感想やご意見などは、youjimail@yahoo.co.jpまで。

幼児の教育

第一〇四巻 第十号
（二〇〇五年十月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十七年十月一日
編集兼発行人 浜口順子
発行所 日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所 図書印刷株式会社
〒108—8620 東京都港区三田五—一二—一
発売所 株式会社 フレーベル館
〒113—8611 東京都文京区本駒込
六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替 〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆ 本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

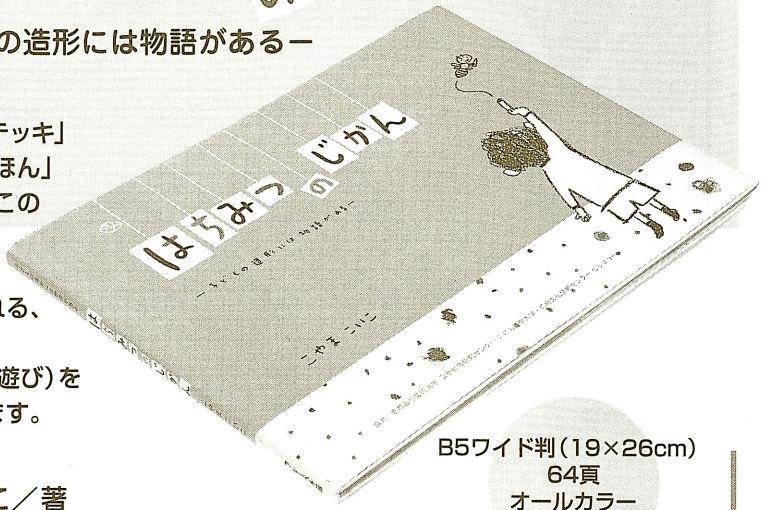
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最新刊

子どもの創造力を育み、アート感覚を養う本

はちみつのじかん

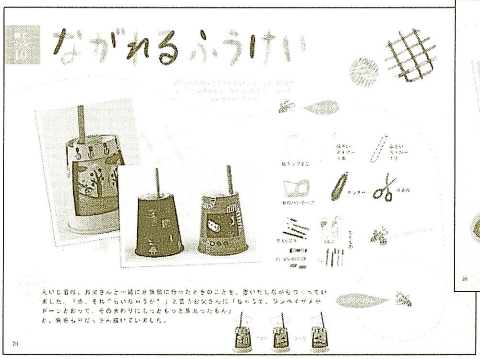
ー子どもの造形には物語があるー

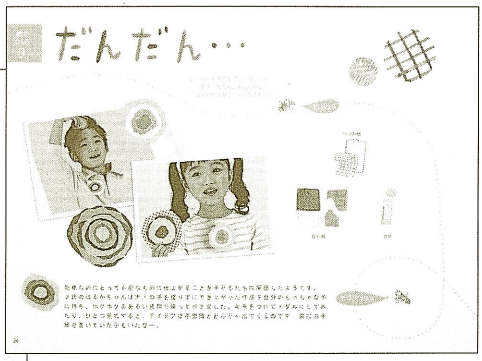


「すてきなステッキ」
「まどぎわえほん」
「いたずらっこの
のぞきあな」
など、
創造性あふれる、
造形作品の
創り方（造形遊び）を
紹介しています。

B5ワイド判（19×26cm）
64頁
オールカラー
定価1,680円（税込）

- こやま　こいこ／著
- 京都造形芸術大学芸術教育研究センターこども芸術大学
  芸術文化情報センターピッコリー／協力





構成

PART1　はいひんへんしん
PART2　紙でつくる
PART3　色をたのしむ
PART4　自然の中から

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

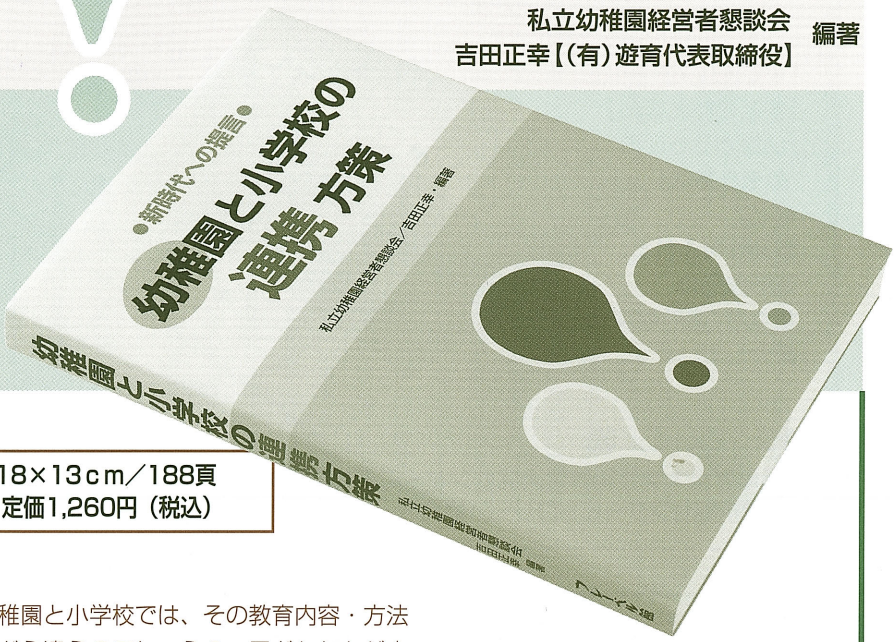
幼児の教育　第一〇四巻　第十号　平成十七年十月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

最新刊

●新時代への提言●

幼稚園と小学校の連携方策

私立幼稚園経営者懇談会
吉田正幸【（有）遊育代表取締役】　編著



18×13cm／188頁
定価1,260円（税込）

幼稚園と小学校では、その教育内容・方法はどう違うのでしょう？　子どもたちが本来の姿で生活できる力を育てていくためには、幼稚園と小学校との違いを踏まえた連携をとっていくことが大切です。
本書は、幼小連携のアンケート調査を踏まえ、さまざまな実践例を取りあげながら、メリット、課題、問題点などを探っています。子どもにとっての最善策をいっしょに考えてみましょう。

【目次から】

第１章　今なぜ幼小連携が問われているのか
第２章　幼小連携アンケート調査から見えてくるもの
第３章　幼小連携の実践事例
第４章　これからの幼小連携とは
終　章　幼経懇からの提言

キンダーブックの
フレーベル館
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆